タイ語母語話者の日本語発音に関する干渉の考察と指導提案

アサダーユット・チューシー

(原稿受理日　2004年3月16日)

タイ語母語話者の日本語学習者が増えるにつれて、様々な日本語の学習についての問題が解き明かされているが、発音の問題はまだ解き明かされていない。タイの日本語教育では発音の指導項目が無視されていることは事実である。国際交流基金の『日本語はつおんタイ語版』という教科書が1980年にタイ語に訳され、出版されたが、今は絶版となる。他の教科書にもアクセントや発音案内などの項目はめったにない。日本語は、タイ語のように声調を持っていないので、学習者はどのように発音しても意味が変わらないだろうと思っている。英語や西洋言語のようにアクセントを指摘する辞書などの教材もきちんと整っていないため、これらの現状を考えると、タイにおける日本語教育では発音の項目が無視されると言っても過言ではない。

タイ語母語話者の日本語学習者の発音練習やアクセントについての考察が少なく、タイ人が研究したものは見当たらなかった。日本人の研究者や教員はタイ語を良く知らないため、実際にどうして様々な発音の問題が発生したのかよく理解できない。例えば、鈴木（1963）や大西（1974）などの従来の研究の成果はまだ日本人の立場から見た注目事項である。従って、発音の問題点を明確にできれば、効果的な教授法を工夫できるのではないかと執筆者は思っている。

本研究は、タイ人である執筆者がタイ語の干渉によって起こる日本語発音やアクセントの不自然さについて考察し、その結果に基づき、どのように発音練習をすれば良いか提案をし、日本語教員がタイ語の干渉に注意しながら、日本語の発音やアクセントの特徴を頭に入れ、学習者に指導できるようにする試みである。

本稿では、日本語の音声記号とタイ語の音声記号を使うために、同じ記号だが違う音を示す場合もある。日本語の音声記号を使う時に[ ]の中に書き、タイ語の音声記号を使う時に/ /の中に書く。尚、先行研究で書かれた記号は、誤解しないように、本稿で使っている記号に合わせて書き直してある。

1．先行研究

タイ語母語話者の日本語発音についての研究は少ないために、本研究では鈴木（1963)、大西（1974, 1977）にあるタイ語母語話者の日本語発音についての考察を参考にしたい。

鈴木（1963）は、タイ語と日本語の音韻組織を比較し、類似音がない場合は正しい発音が困難になると述べた。更に、タイ語母語話者が日本語を学習する時に、困難となる項目を以下のように取り上げた。

① [k]と[g]の対立を識別し発音すること

② 日本語の[i]は、いわゆる硬口蓋音化した音であり、子音と結びつくと、その影響で子音も口蓋化し、外国人が日本語を学習する場合の厄介な問題点の製造元になっている。

③ 日本語もタイ語も「U」という記号があるが、日本語の「U」は「ひらロ」で[ɯ]と発音することに対して、タイ語の「U」は「まるロ」で[u]と発音する。

④ タイ語には[g]が欠けているために、タイ語の/k/を転用してくる傾向が強い。

⑤ 「シ」を/chi/と発音する。

⑥ 「チ」を/ci/のように発音し、識別は困難ではないが、タイ語母語話者はその影響で「ツ」を[tʃu]のように発音してしまう。

⑦ 「ラ」行音の発音は、/r/と/l/の問題よりも、/d/との混同という大きい問題がある。

⑧ はねる音「ン」と促音「ッ」が挿入されるものと挿入されないものの混同がある。

⑨ アクセントについて、タイ語と日本語は同じく「高さアクセント」があるために、英語母語話者よりアクセントを簡単に理解できる。ただ、「橋」は「ハ」を低く、「シ」を高くするというような音節間の相対的な高低布置になれない点で困難である。

執筆者は鈴木（1963）が注目したところを読んで，不明確なところを見つけた。例えば，鈴木（1963）のp.14には、[b]を発音する場合は、タイ語母語話者は母国語の有声音/b/よりも、無気音/p/を、日本語の[d]を発音する場合は日本語の有声音[d]よりも、無気音/t/を多く転用する事実がある、と書いている。しかし、タイ語母語話者は「B」を見て/p/とは発音しない。なぜなら、一般的に「B」という表記は英語教育の影響で/b/と発音するからである。従って、鈴木の日本語学習者は中国語[(1)]のような語学を勉強した中国系タイ人かもしれない[(2)]、あるいはその時代の日本語の教材が不充分な状態だったという原因があって、このような不正確な結果が出たのであろう。

大西（1974）は，タイ人の日本語発音の問題点を次のように指摘した。

① 「シ」と「チ」の区別ができない。「シ」を/chi/に，「チ」を/ci/に変える

② 「ツ」を「ス＊」に変える（「ス＊」は「ス」の摩擦を強めた音）

③ 「ジ」を/ci/あるいは/ji/[(3)]に変える。この現象は「ジャ」「ジュ」「ジョ」の場合も同じ。

④ 「ザ」「ゼ」「ゾ」という有声音は無声音化される。

⑤ 「ガ」行を[g-]ではなく，/k-/あるいは/ŋ-/のように発音する。

⑥ 「ン」「ッ」という表記がある時に１拍として読まずに前の拍と合わせて１音節として読む。

⑦ 「ン」の次の拍が母音拍である時、[n]を増してしまう。例えば、レンアイをレンナイのように読む。

⑧ 拗音の場合、「ミョー」や「キョー」などは「ミヨー」「キヨー」のように聞こえる。「ニャ」「キャ」などは「ニェ」（/nɛ/）「キェ」（/kɛ/）のようになる。拗音と「ン」が共起する場合、特に言いにくいという。

⑨ 短母音と長母音の区別について、タイ語母語話者は短母音に促音を入れたり、促音がある単語で促音を省略したり、長音があるところを短母音のように発音したり、短母音のところを長母音のように発音したりする。

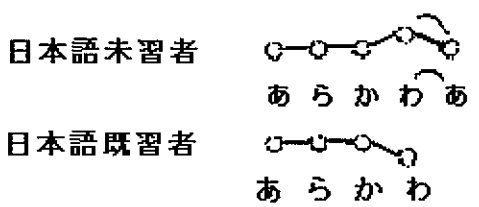
⑩　短母音の場合、声門閉鎖音がつきやすい。例えば，手→/te?/

大西はタイ語母語話者のインフォーマントを扱ったが、インフォーマントが中国の潮州系なので、潮州語の影響を受け、発音調査は意外な結果（例えば⑦）が出たのだろうと注目した。しかし、⑦のような発音は恐らく表記に関係があるであろう。「れんあい」を「RENAI」のように書けば、読む人は [ren-ai] ではなく [re-nai] あるいは [ren-nai] と読み取ってしまった可能性もある。一般的には、タイ人は⑦のような連声の発音をしない。

また、タイ語は拍（モーラ）ではなく音節のシステムを使うので、短母音を長母音に変えても音節数は変わらないが、日本語のようにモーラ数を数えたら、違いが分かる。この部分を次の「タイ語の発音」の項目で改めて考察してみたい。

大西（1977）は大西（1974）に次いでタイ人のアクセントを考察した。タイ語にある単語は声調が決まっているので、アクセントがないように思われるが、実際には英語と同じように強弱アクセントも存在していると述べた。しかし、大西（1977）は強弱アクセントを考察せずに、声調体系を持っているタイ語を使っているタイ語母語話者はどのように日本語のアクセントに変えるかということだけを考察した。その考察の結果には、タイ人は ▁▔▁ というアクセントで発音しがちだが、日本語を習ったことのあるタイ人は殆どこのアクセントで発音せず、大抵 ▔▁ のように発音すると述べた。

図１　大西（1977）のタイ語母語話者の日本語アクセント



但し、どうしてこのような現象が発生したのかは大西は分からないと述べた。これについて、執筆者は興味を持っているので、アクセントの項目で考察したい。

更に、大西はタイ語母語話者の日本語のアクセントの発音を考察し、４つの種類に分類した。それは、基本アクセント（最も多い類）、末高アクセント、平式アクセント、その他のアクセントだ。（次のページの表１を参照。）

表１の結果を見ると、タイ語母語話者の日本語アクセントはばらばらであることが分かる。その中で、正しいアクセントもあるが、大西が述べたように、殆どは日本語の標準語では存在しない基本アクセントなので、聞き手にとっては理解しにくくなる。

更に、大西は助詞のアクセントも考察し、「の・へ・は・と・に・を」などの助詞がアクセントの上がる点になると指摘した。

以上で、３つの先行研究を考察した。次に、本稿の調査に入る前にタイ語の発音も見て、参考にしたい。

表１　大西（1977）で分類したタイ語母語話者の日本語アクセント

①	基本アクセント		ぐんじん、ちかてつ、いか等
②	末高アクセント		でんわ、ざっし、かがみ等
③	平式アクセント		かぞく、でんわ、ふうとう等
④	その他のアクセント		
	頭高型		でんしゃ、みかん、ごはん等
	中高型		おかし、はさみ、おきゃく等
	その他		ひなまつり、おちゃのみず等

2. タイ語の発音

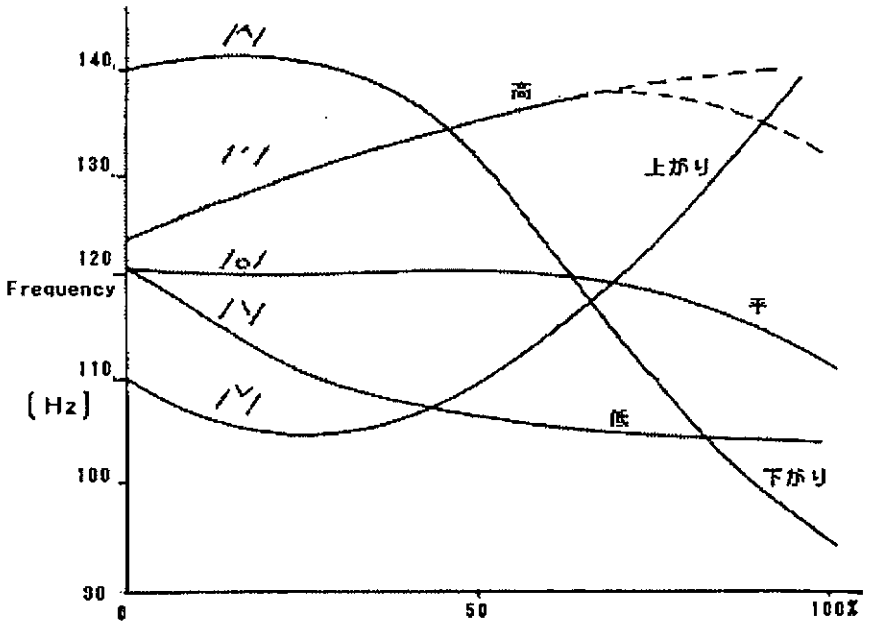
タイ語の干渉を考察するために、タイ語の発音について、กาญจนา (1978) を考察したい。กาญจนา (1978) はタイ語の音韻について様々な角度から考察した。ここでは音声記号と声調について取り上げる。

表２　タイ語の音声記号（กาญจนา, 1978 : 42）

子音	両唇	唇歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p ph b		t th d	c ch	k kh	ʔ
摩擦音		f	s			h
鼻音	m		n		ŋ	
震え音			r			
側面音			l			
接近音	w			j	(w)	
母音				前　中　後 i iː　ɯ ɯː　u uː e eː　ɤ ɤː　o oː ɛ ɛː　ɔ ɔː aaː		
声調	平(無標)　低 ˋ　下り ˆ　高 ˊ　上り ˇ					

（声調については次のページの図２を参照）

図２　タイ語の声調の音波値（กาญจนา, 1978:154）



タイ語の発音の制約は更にある。例えば、語末子音を入れると、声調が変わったり、パターンが少なくなったりする。以下に、タイ語の声調体系に影響を与える語末子音についての制約を紹介したい。

促音化単語と声調の制約

タイの語末子音は、/k/, /p/, /t/, /m/, /n/, /ŋ/, /j/, /w/である。この中で、英語の二重母音(Diphthong)である [ai] と [au] はタイ語の /aj/ と /aw/ という「母音＋語末子音」となる。

「促音化単語」はタイ語で /kham taaj/（คำตาย）であり、短母音と /p/, /t/, /k/ という語末子音（日本語の促音に相当する）が共起する単語である。これらの単語は、語頭子音が無気音であれば、声調は低音[4]となり、語頭子音が有気音であれば、声調は高音となる。これ以外の声調にはならない[5]。例は以下の通りである。

ปัก /pàk/	จด /còt/	ดิบ /dìp/[6]	ติบ/tìp/
พัก /phák/	ชด /chót/	ทิพย์ /thíp/	เล็ก /lék/

更に，短母音の後ろに語末子音がつかない場合も、特別に声門閉鎖音(Glottal Stop)という音(/ʔ/)が表われ、声調も促音化と同じである。例えば、

โปะ /pòʔ/	จะ /caʔ/	ดื /dɯ̀ʔ/	ตุ /tùʔ/
เพะ /phéʔ/	แชะ /chɛ́ʔ/	เทาะ /thɔ́ʔ/	เลอะ/lɤ̀ʔ/

しかし、このような単語は、後ろに何か付いてくる時に、声門閉鎖音がなくなり、声調が平音になる。例えば、"คุณจะไปไหน" /khun ca paj nǎj/（あなたはどこへ行きますか）の /caʔ/ は /ca/ となる。

この声調に関する制約は、確かに日本語アクセントの発音の時に干渉する。詳細は次の項目で説明する。

3．タイ語母語話者の日本語発音の問題点：発音の違い

3.1　日本語の発音から見る相違点

まず日本語の音声記号を考察し、以上の กาญจนา（1978）のタイ語の音声記号表と比較する。

表３　日本語の音声記号

子音	両唇	唇歯	歯茎	歯茎硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
破裂音	p b		t d			k g		ʔ
破擦音			ts dz	tʃ dʒ				
摩擦音	ɸ		s z	ʃ ʒ	ç			h
鼻音	m		n		ɲ	ŋ	ɴ	
弾き音			ɾ					
接近音					j	w		
母音					i e a	ɯ o		

（日本語教育学会，1982：17）

タイ語にない日本語の発音は、[g], [ɸ], [z], [ʃ], [ʒ], [ts], [dz], [dʒ], [ç], [ɲ], [ɴ], [ɾ] である。だが、同じ記号で書いている [tʃ], [w], [ɯ] も少しタイ語の /tʃ/, /w/, /ɯ/ と違う。これらの違いを纏め、また執筆者の従来の観察により、次のような注意事項が指摘できる。

①　タイ語では無声音と対立している有声音（[g], [z], [ʒ], [dʒ]）がないために、有声音をうまく発音できない。

②　タイ語では破擦音が存在しないために、歯茎硬口蓋で調音するのはどちらも /tʃ/ と認識される。基本的にはタイ語の /tʃ/ は日本語の [tʃ] に近いが、実際は人により、語彙により、日本語の [ʃ] に近い場合もある。

③　日本語の特殊な子音 [ts] と [dz] を発音できない。それに、[s] と区別することができない。

これらの３つの項目はタイ語母語話者に日本語の発音について指導しても、学習者ができるようになるまではかなり時間がかかる。

更に、タイ語にない発音 [ɸ], [ç], [ɲ], [ɴ], [ɾ], [ɯ] に関して、次の点を発見した。

④　日本語では [ɸ] と [ç] は [h] の異音なので、タイ語母語話者は殆ど /fu/ と /hi/ と発音してしまう。[çi] の場合は、/hi/ と発音しても問題にならない。[ɸɯ] の場合は、ヘボン式の表記で「FU」と書くことが影響していて、/fu/ のように発音しても不自然ではないと認める日本人もいる。

⑤　④と同じように、[ɲ] は [n] の異音なので、/n/ と発音しても差異があまりない。[ɴ] は「ん」の異音であり、発音方法も曖昧であるために、タイ語の /n/ または /ŋ/ と発音しても特に問題ない。

⑥　[ɾ] という弾き音はタイ語では存在しない。「R」という表記で書いても、タイ語の震え音 /r/ と全く違うので、側面音 /l/ と発音するのである。これについて、伊野（1998）には、日本語のローマ字表記を「R」から「L」に変えたら発音が正しくなるだろうという提案もある。だが、弾き音は側面音と違うのであるが、正しく発音を身につけさせるためには、指導が必要であろう。

⑦　日本語の母音 [ɯ] はタイ語の /ɯ/ と違う。タイ語の /u/ に似ているが、口が丸くないのは日本語の [ɯ] の特徴なので、その部分に注意させれば良いであろう。

以上で、発音図から見た問題点について、主な問題点が３つあり、それらは前に考察した鈴木（1963）と大西（1974）と変わらない。副次的な問題点が４つある。このレベルの問題点はタイ語のある発音のままで発音しても通じるが、正しい発音ではないということである。また、発音練習の面を考えると、３つの主な問題点ほど時間がかからないだろう。

3.2　調査から見る相違点

この項目で、日本語の特殊音と拗音とアクセントについて考察したい。これらの問題は音声記号表で見られないものなので、調査を行い、タイ語母語話者の日本語発音について次のような項目で考察してみる。

①促音　　②長音　　③撥音　　④拗音　　⑤アクセント

また、これ以外、面白い問題点を見つけたら、「その他」の項目にした。調査では、タイ語母語話者に図３の読み物を読んでもらった。まず、読み物を５分位読んでもらってから、準備が整ってから録音した。その後、獲得したデータを東京方言の日本語母語話者の発音と比較し、分析した。調べる対象は日本語初級・中級・上級学習者だった。調査対象（協力者）の人数は９人だった。

図3　予備調査のための読み物の内容

わたしは　きょねん　ドイツごを　べんきょう　しました。でも，いま　もう　わすれたから，　ドイツじんと　あっても　なかなか　はなす　ことが　できません。　ドイツごは　えいごに　にていますが，ぶんぽうは　えいごより　むずかしいです。　ドイツごの　ちしきが　ない　わたしは　きのう　ともだちの　しょうかいで　ある　ドイツじんと　しょくじに　いきました。　この　ドイツじんは　ともだちの　かいしゃに　つとめて　います。ちょうど　ちゅうごくじんの　ともだちも　あって，さんにんで　しょくじに　いきました。

ファミレスで　ドイツじんの　ともだちは　にほんごの　メニューを　よめないので，　ちゅうもん　する　ときに　とっても　こまりました。ようやく，ちゅうごくじんの　ともだちに　ちゅうもん　して　もらいました。キムチラーメン，　ゆどうふなどを　ちゅうもん　しました。　つい　こんにゃくを　まちがって　ちゅうもん　して　しまいましたが，　その　ドイツじんは　おいしいと　いって　くれたので，　わたしと　ちゅうごくじんの　ともだちは　ほっと　しました。　ぜんぶで　さんぜんよんひゃくえん　です。そのあと　りょうしゅうしょを　はっこう　して　もらいました。しょくじの　あと，　ちょっと　さんぽ　してから　わかれました。ドイツじんと　あった　きっかけで，　もう　いっかい　ドイツごを　べんきょう　しなおそうと　おもいます。

表4　タイ語母語話者の日本語発音の問題点の調査結果

		学習歴	1	2	3	4	5	6	7	8
1	A（男・25）	J=1	—	●	—	●	●	—	●	—
2	B（男・28）	T=7,J=2	—	—	—	○	●	○	—	—
3	C（女・21）	T=3,J=1	—	—	—	●	●	○	●	●
4	D（女・25）	T=6,J=1	—	—	—	●	●	—	●	—
5	E（女・27）	T=6,J=3	○	—	—	●	—	—	●	●
6	F（女・24）	T=4,J=1	—	—	—	●	●	●	●	—
7	G（女・24）	T=4,J=3	—	—	—	○	—	—	●	—
8	H（女・21）	T=3,J=1	—	—	—	●	●	○	●	—
9	J（男・21）	J=1	—	—	—	●	●	●	●	—

（学習歴は日本語の学習歴のことであり、Tはタイでの日本語学習、Jは日本での日本語学習、数字の単位は年となる。また、問題点の欄では、●は不自然な点が多い、○は不自然な点があるが少ないということである。）

問題点リスト

1．促音の問題　例えば、促音の拍をつけないことなど。

2．長音の問題　例えば、「きょねん」→「きょうねん」など。

3．撥音の問題　例えば、「ん」の異音の使い分けが分からないことなど。

4．拗音の問題　例えば、[kjonɴ] → /khíawneŋ/ など。

5．アクセントの問題　ある単語のアクセントが間違えた。例えば、「会↘って」→「あ↗って」、「しょ↗くじ」→「しょ↘くじ」

6．助詞のアクセントの問題　殆ど助詞（格助詞・接続助詞）をタイ語の高音にしたこと。

7．その他の問題：タイ語にある発音を使うこと等。例えば、[doitsɯ] → /dój(t)sù/, [kimɯtʃi] → /kimci/ など。

8．その他の問題：無気音化

①促音

タイ語では促音化語末子音があるために、促音を発音する時に、問題になるのは、タイ語にない [s], [ʃ] の促音の点と、促音の拍の点であろう。前者について、本調査では項目に入れなかったが、[zaʃʃi] を [zat-ʃi] に、[kissatɴ] を [kitsatɴ] に代えて読んでしまう傾向が高いようである。本調査の前の観察によれば、100% の初級日本語のタイ人学習者はその促音を /t/ という語末子音のように発音した。これはタイ語の語末子音の影響である。

もう一つの問題は、促音の拍のことである。タイ語は音節体系を使っているために、促音に別の拍を上げることが意識されない。本調査は、明確に促音に拍を足さない場合を「間違い」と見なす。ただし、一般的な会話には問題ない。速く読んで促音を明確に発音しない協力者が１人いた。

②長音

長音の問題は特にないが、ただ拍を足すかどうかというところだけである。本調査では、「きょねん」を「きょうねん」と読む間違いが１件あったが、同じ協力者でも他の部分ではミスが見つからない。なぜ「きょうねん」になってしまうのかというと、協力者が「きょう」のところをタイ語の下がり声調を使うので、時間がかかって、聞き手はその拍が伸ばされたように聞き取ってしまうのだ。これは、大西（1977）が発見した「あらかわ」（図１を参照）の場合と同じである。すなわち、タイ語の下がり音と上がり音は平音、低音、高音より特に発音する時間がかかるために、拍が自動的に伸びてしまうのである。「あらかわ」の「わ」を低音として発音する場合は、特に長音化にならないことに対して、「わ」を下がり音として発音すると、音が伸びてしまう。日本語に馴染んでいないタイ人は、下がり音で終わることが多い。日本語の平板型のアクセントでは最後の拍の音が浮いているが、タイ語では短母音の声調の制限があり、その発音ができないので、短母音を長母音に変化させてタイ人にとって一番近い声調、つまり下がり音、に変えるからである。

また、長音化してしまう原因は英語から影響を受けたとも言える。例えば、都市名、「京都」「大阪」「広島」は「キョウトウ」（/kiawto:/）「オサカア」（/o:sa:kâ:/）「ヒロシマア」（/híro:chímâ:/, /hiro:chimâ:/）となる。これらの都市名は英語を通して受けた借語であるから、英語の [o][a] の長音の影響を受けたのである。

更に、タイ語の拗音は基本的に長音であるので、長音ではない拗音の場合は発音しにくい。これも協力者が「去年」を「きょうねん」と発音してしまう原因かもしれない。

最近、漫画やファッションで日本文化のブームが高まるにつれて、輸入される日本語も多くなっている。日本語の単語のアクセントが平板型である場合、タイ語では短母音そのままの表記で書くことが多いので、下がり音より高音か低音で発音する傾向が多くなる。しかし、定着した都市名の単語などは、そのまま使われている。

③撥音

調査によると、協力者は皆撥音の異音の使い分けができるので、特に問題ないだろう。拍を足すことも発話のレベルに入ると、拍が抜けたりすることがない。[N] がどのように発音するかということが分からなくても、発話のレベルでは、[m], [n], [ŋ] の使い分けが分かるだけで、充分だろう。

④拗音（二重母音）

日本語には、[-ja], [-jɯ], [-jo] がある。この３つの拗音はタイ語にはないものである。タイ語の二重母音は、/-ia/, /-ɯa/, /-ua/ である。これらの二重母音の特徴は長く発音することなので、短く発音する日本語の拗音はかなり難しい。例として、日本語を学習したことのない日本で働いているタイ語母語話者は「ひゃく（百）」を、[çjakɯ] ではなく /hɛ́k/ と発音することなどが挙げられる。 [-ja]、[-jʔ], [-jo] という３つの発音の表記はタイ語には当てはまるものがないという理由で、一番似ている表記 /-ia/, /-iw/, /-iaw/ で発音されているのである[(7)]。

図４　タイ語母語話者の二重母音の発音

日本語	みゃ	みゃあ	みゅ	みゅう	みょ	みょう
タイ語母語話者の発音	/mía/	/mia/	/míw/	/miw/	/míaw/	/miaw/

[mjɯ] と /miw/ が違うが、それより [mjo] を /miaw/ と発音することが多い。

⑤アクセント

本調査では、２つの項目として観察した。普通の単語のアクセントと、助詞（格助詞、係助詞、接続助詞）のアクセントをそれぞれ５番、６番の項目で観察した。

全体的に見ると、日本で日本語を学習する協力者はあまりアクセントの問題がないようである。特に、タイで日本語を学習したことがないタイ語母語話者はアクセントがかなり正しい。例えば、「は↗っこう(発行)」を「は↘っこう」と発音する協力者が２人いる。なぜそのように発音したか、理由を聞くと、「は↘こ」（箱）に似ているから、「箱」と同じように頭高型にしたと理由を挙げた。（実は、「箱」は平板型として「は↗こ」と発音する。）また、「ファ↗ミレス」という平板型を「ファミ↗レ↘ス」のように発音した協力者も多かった。

他の例：

「よ↗うやく」→「よ↗うや↘く」,「よ↘うやく」

「しょ↗くじ」→「しょ↘くじ」

本調査の協力者はあまり日本語のアクセントのルールを知らないので、聞いたままによって適当に発音していたと言えよう。

また、本調査の協力者は、助詞のアクセントについてよく注意し、「が・を・に」という格助詞や、「は」という係助詞や、「が、ので、で」という接続助詞を低音にしていた。助詞を強調するために、高音にする協力者もいる。逆に、注意しすぎて、無理に低音にすることもあった。タイ語母語話者は大西（1977）で考察した通りに、助詞の部分を頻繁に高音にしている。その原因は、前述のように、声調と短母音の制約があることである。「が・に・は・ので、で」というような助詞は有気音子音なので、タイ語に変えると、「有気音＋短母音」という形になり、声調が自動的に高音になる。しかし、「を」の場合は、タイ語の規則によると、無気音子音なので、低音になるはずだったが、「を」と「お」を区別するために、「お」を /ò/ と発音し、一方「を」を /ó/ と発音するような指導法もある。よって、学習者は助詞の部分を全て高音にするように教育されてしまった。実際の日本人同士の会話を見ると、低音にすることが多いが、場合によって高音にすることもある。それはイントネーションに関係があるからだろう。日本の若者が助詞を高音にすること（例えば「ので」→「の↗でぇ」、「から」→「か↗らぁ」、「は」→「わ↗あ」等）が多いので、日本に滞在をしているタイ語母語話者はそれを見て真似したと考えられる。

⑥その他

読み物の中で、タイ語にも存在している単語がある。その単語は日本語ふうに発音せずにタイ語の発音でした協力者が多い。例えば、「キムチ」を /kimchì/ と発音したり、「こんにゃく」を /khɔn-jak-khù/ と発音したりした。それ以外に、「メニュー」→ /meːnuː/ も見られる。

殆どの協力者は「ドイツ」[8]を [doitsɯ] ではなく、/dɔ́j(t)sɯ̀/ と発音した。理由を聞くと、ドイツ人は自分の国を [doitsɯ] ではなく /dɔ́j(t)sɯ/ のように /ɔ/ と発音しているから、それを真似したと述べた協力者が１人いるが、タイ語の干渉もあると考えられる。タイ語では、/o/ の短母音が /i/ と共起する単語は全くない。/oi/（タイ語では /oj/）と発音することは少なく、タイ語ではその単語の表記がない。表記による発音に段々馴染んで、[oj] という音を [oːj] あるいは [ɔj] のどちらかに変えて表記するのである。例えば、

× กย [koj]　　○ ก๊อย[kɔj]　　○ โกย[koːj]

この理由で、「ドイツ」を /dɔ́itsu/ と発音したのだろう。また、タイ語では、子音に母音がついていない場合、それを /ɔː/ と自動的に発音することになることから考えて、/ɔː/ が他の母音よりも発音しやすいからであろう[9]。しかし、他の単語、例えば「問い合わせ」など、を発音するように確認してみると、全員が正しく [toiawase] と発音した。更に、本調査では見つからなかったが、[tɔiawase] や [nihɔn]（日本）と発音するタイ語母語話者もいた。

もう一つ発見した問題点は、無気音化ということである。本調査では、そう発音している協力者を1人だけ見つけた。基本的には、語頭の子音は有気音として発音し、語中の子音は無気音として発音するということであるが、「ともだち」を /thoːmoːdachì/ でなく、/toːmoːdacì/ と発音し、「ちゅうもん」「ちょうど」の「ち」は全てタイ語の /c/ に変えて発音した。これは個性的な発音とも考えられるが、多数のデータを集めれば、このように発音している人も少なくないだろう。

3.3 まとめ

以上で、発音図と調査からみたタイ語母語話者の日本語発音についての問題点が明らかになった。次の項目では、どのような指導を導入すればいいかという提案を述べておきたい。

4. 問題点に応える指導提案

4.1 母音の問題

タイ語の母音が日本語の母音より多いために、問題点は日本語の [ɯ] とタイ語の /u/, /ɯ/ と拗音だけである。

タイ語の /ɯ/ は日本語の [ɯ] と少し違うため、指導する時に、タイ語母語話者に /u/ と発音させるが、口を丸くしない（発音しない）状態の口をするように指導すれば良い。

また、拗音の場合には、「りや」、「りゆ」、「りよ」を、「りゃ」、「りゅ」、「りょ」になるように早く発音させれば良い。それに、「びよういん」と「びょういん」のミニマル・ペアの練習をさせれば、学習者は聞いて区別できるようになり、耳のなまりの問題を解決できるだろう。

4.2 子音の問題

①カ / ガ行

カ行を発音する時に、語頭子音の場合は /kh/ に似ていて、語中の場合は /k/ に似ているというふうに説明しても良い。有声音のガ行はタイ語には存在しないが、タイ語母語話者の殆どは日本語を勉強する前に英語を勉強した人が多い。タイ語にない英語の [g] だと説明によれば、英語の発音ができる人はすぐに発音できるだろう。また、語中の場合、その [g] がタイ語にもある /ŋ/ に変わると説明する。しかし、一般の日本人はこれらの異音を区別することができないということも注意しなければならない。タイ語母語話者は一般的に有声音 [g] に慣れないので、すぐ発音できるようにならない。そのために、少しずつ練習すれば発音に慣れてくるだろう。

②サ / ザ行

サ行では「シ」と「シャ・シュ・ショ」の発音が問題となる。タイ語の /ch/ の発音は日本語の [tʃi] に似ているが、それでもなく、[ʃi] でもない。よって、練習する時に、「チ」と共に練習すれば一番良い。英語にも「sh」と「ch」の区別があるが、殆どのタイ人はそれをうまく区別できない。留意点として、発音する時に、学習者に自分の口からの息に注目させる。例えば、「シ」を発音する時に、息

は弱くて長く持続できるのに対して、「チ」を発音する時に、息はタイ語の /ch/ より強くてすぐ止まる、ということを指導すべきである。

ザ行の場合は、ガ行と同じように指導すべきである。実際に「ザ」は [za] と [dza] があるが、タイ語母語話者にそこまで区別できるように指導しなくてもいい。練習もガ行と同じように、少しずつ練習させたほうがいい。

「ジ」の発音は、タイ語に存在しないために、英語の単語の表記をタイ語化する時に、「J」([dʒ]) を「ย」(/j/) か「จ」(/c/) にする。これについて発音の練習を行う際に、英語か日本語の「J」を発音させれば、学習者が分かりやすいだろう。また、最近はタイ語の /c/ を [dʒ] のように発音して歌を歌っている歌手も少なくないので、それをモデルにして発音させてみれば、すぐ分かり、タイ語の元の子音と区別できるようになるだろう。

③タ / ダ行

タ行は、語頭の時はタイ語の /th/ にし、語中の時はタイ語の /t/ にするというふうに指導すると良い。「チ」について、上述のように、「シ」と共に練習し、区別できるようにすれば効率的である。但し、「チ」の語中の時に、タイ語の /c/ のように発音している人とそうしない人がいるので、タイ語の /ch/ と /c/ の中間の程度で曖昧に発音すれば、一番日本語の語中の「チ」に近い。

「ツ」の発音について、[t] のように歯茎に舌の先を接してすぐに [sɯ] と発音するように練習させる。

④ナ行

ナ行では、ニは [ɲi] と発音するが、それは指導しなくてもいい。日本人でも [ni] と [ɲi] の区別をしないから、タイ語のまま発音しても問題はない。

⑤ハ行

ハ行では、まず初級段階から「ハ」と「ヘ」は助詞の場合、[wa] と [e] と発音する点に注意させる。ハ行もタイ語の /h/ と変わらない。が、「ヒ」(拗音を含む) と「フ」は特別に発音する。「ヒ」の場合、タイ語の /hi/ に息を足すというふうに指導すべきだ。最初は学習者がうまく発音できないだろうが、この「ヒ」の特徴を教えなければ、いつも「ひも」のような言葉を「しも」のように聞き間違えてしまうのである。従って、耳のなまりの問題の解決するために、この特徴を前もって教えるべきである。

「フ」の場合は、タイにおける多くの日本語教科書や辞書はよく「FU」と表記するが、実際には [ɸɯ] だと説明しておくべきである。ロウソクを消す時の口にし、発音すれば、日本語の「フ」に近い。カタカナの「ファ・フィ・フェ・フォ」の発音の時も、英語と同じように発音している日本人もあるが、「フ」のように発音している人もいるという現実を学習者に説明し加えるのが良い。

⑥バ / パ行

バ行はタイ語の /b/ のままで良い。パ行について、語頭の時はタイ語の /ph/ に似ていて、語中の時はタイ語の /p/ に似ていると指導すれば良い。[10]

⑦マ行

マ行について、タイ語の /m/ をそのまま使えば良い。

⑧ヤ行

日本語では、「ヤ」、「ユ」、「ヨ」しかないので、タイ語母語話者にとって問題ない。

⑨ラ行

タイ語では、[r] のような弾き音が存在しないために、ラ行を正しく発音させるには時間がかかる。タイ語には、震え音と側面音がある。タイ語母語話者は、「R」という表記を見ると、タイ語の震え音 /r/ で発音してしまうだろう。また英語の [r] ともかなり違いがある。逆に、日本語のラ行はタイ語の側面音 /l/ に似ている。

更に、日本語のラ行はダ行に近い。[ra] を [da] に聞き間違うこともあり、一方で [da] を [ra] と聞き取ってしまう場合も少なくない。この問題については今後に課題にしたい。

⑩ワ・ヲ

「ワ」の発音はタイ語母語話者にとって特に問題ない。また、「ヲ」については、前述の通りに、現在のタイにおける日本語教育では、「オ」と区別させるために、わざと声調の違いを作り、「ヲ」なら高音となり、「オ」なら低音となるという臨時的なルールを作る。しかし、このルールこそ、「ヲ」という助詞に悪影響を与えるのである。場合によって「ヲ」を高音にしたほうが自然な場合もある。例えば、動詞の対象を強調したい場合などである。しかし，基本的に，助詞は格の後ろにつけるものなので、前の拍と同じ高さ（つまり平板型のアクセント）にし、格にある単語が尾高型である場合は、「ヲ」助詞が低音となることを指導すべきである。よって、「ヲ」は「オ」と同じ発音を持っていると説明したほうが妥当である。

以上で、子音の発音についての指導法を述べた。基本的に、タイ語にあるものはそのまま日本語で使わせ、タイ語にないものは学習者の周りに見られるもの（英語か日本語の教材）を使って発音の導入を行えば、学習者の負担を減らせるのである。

4.3 特殊音の問題

撥音の指導は、他の外国人と同じ方法で良い。現在の日本語教育では、「ん」の異音を教えている。ある教科書は、[m], [n], [ŋ] の異音だけ教えている。例えば、「パン」を [paŋ] と発音させるなどである。それに、「パン」を [paɴ]（[paŋ]）と発音させる教科書もある。この部分は、差異があまりないので、どのような指導法を使っても問題ないであろう。

長音と促音の問題について、拍を足すことも大事である。前述のように、会話では問題が特にないと考えられる。タイ語母語話者は、タイ語のように、日本語の促音や長音を声調と結びつけてルールを作るが、それは良くない。例えば、短母音の単語を高音にして発音すれば、多くのタイ語母語話者はこれが「ッ」がついていると勘違いしてしまう。

タイ語に定着した日本語（都市名：「京都」、「東京」、「大阪」、ブランド名：「トヨタ」、「ホンダ」）について、日本語ではタイ語と違う発音をしていることに注意させる。

4.4 アクセントの問題

調査によって、アクセントはタイ語母語話者にとって問題となることが分かった。多くの協力者は、アクセントの規則をよく知らず、勉強したことがないので、どの単語をどのように発音したらいいか不安であるなどと答えた。従って、アクセントの勉強がなぜ重要なのかということを指導者が認識しなければならない。その後、学習者にも注意し、最も考察しやすいアクセントのルールから、例外に至るまで教えれば良い。まず、アクセントがある言語と声調がある言語の違いを説明する。例えば、日本語の単語は一回音が上がったらそれ以上は上がらない。タイ語の単語はそれぞれの音節に声調が決まっているので、一つの単語の中で何回も上がったり下がったりすることもできる。また、日本語のアクセントのパターン、助詞のアクセント、外来語のアクセントなどを徐々に指導すれば、学習者は認識を深め、新しい単語について、いい加減に発音せず、辞書などでチェックし、正しいアクセントで発音できるようになるだろう。

大西（1977）によると、日本語の発音を全然知らない人は、最後の音節で上がり音か高音の声調をつけるが、日本語に馴染んできた後、日本語ではいきなり最後のモーラ（音節）で音を高くしないという特徴を知れば、最後のモーラ（音節）の音を低くするのである。この低音は日本語の平板型あるいは尾高型のアクセントに相当する。しかし、調査で見たように、全ての最後のモーラを低音にするのも不自然である。だから、イントネーションの関係について説明を加えれば良いであろう。

4.5 ポーズの問題

本稿ではポーズの問題について考察しなかったが、頻繁に問題になるのは、名詞句と助詞の接着ということである。助詞は名詞の後ろにつくために、名詞の前に前置詞をつけるタイ語の母語話者にとってなれないことである。この部分について、句切りを説明し、どこにポーズを置けばいいのかということを指導すれば、学習者は徐々に注意し、慣れてくるだろう。

4.6 全体的な問題

ここまで述べてきた指導の提案に関して、最も注意させなければならないのは、音節とモーラ（拍）の違いである。拍で単位を数えると、それぞれの拍は同じ長さでなければならない。タイ語の特徴は、母音には短母音と長母音があるから、２つの音節は音声の長さが等しくないことはあり得る。声調によって音声の長さも普通より少し伸びることもある。このような特徴を学習者に理解させ、学習者にとって新しい単位であるモーラに慣れるように指導する必要がある。モーラのことを把握できたら、長音や促音の拍の問題もなくなり、発音も聞き取りやすくなるだろう。

もう一つは、声調のことである。タイ語には、声調が５つあり、短母音の単語には声調の発生パターンは１つしかない。しかし、タイ語母語話者の日本語では、単母音であれ、長音化された母音であれ、

様々な声調が発生することが可能なので、学習者に日本語を指導する時に、タイ語の声調についての原則を無視させるべきである。

尚、発音の練習を充分にしなければ、口が慣れないので、指導者は日本語のコースを設計する時に、発音の教育も考えなければならない。

5. タイにおける日本語発音教育の展望

現在のタイにおける日本語発音教育について、大学卒業者の声を聞くと、大学できちんと発音の指導を受けていないために、仕事をする時に問題も起こったと言われる。また、間違った発音は、話す人が恥をかくことになり、会話の流れにトラブルを起こし、コミュニケーションと感情（印象）を害する可能性もある。従って、学習者の心理的な負担を減らすためにも、発音の指導が必要である。

また、タイ人教員は、発音の指導を日本人教員に任せることが多いが、日本人教員は学習者の誤りの原因に遡った指導はできないし、日本語の能力がまだ成り立たない初級の学習者に日本語で指導する限界もあるので、発音指導は日本人教員だけに任せず、タイ人教員も、発音の指導をすべきである。特に大学レベルの日本語教育の場合はそうである。それとともに、タイにおける日本語教育を援助する機関または大学は、タイ人教員を研修（あるいはOJT）する必要がある。

参考文献

伊野正洋 (1998) 「ラ行のローマ字 “R” 表記に関する再考察—試論：“L” 表記の可能性—」『国際交流基金バンコック日本語センター紀要』1, 1-11

大西晴彦 (1976) 「タイ人の発音に関する若干の考察」『国際学友会日本語学校紀要』1, 65-80

大西晴彦 (1977) 「タイ人のアクセントに関する若干の考察」『国際学友会日本語学校紀要』2, 24-44

国際交流基金 (1980)『日本語はつおんタイ語版』、凡人社

鈴木忍 (1963) 「発音の指導と問題点—タイ語国民を中心に—」『日本語教育』2、日本語教育学会, 7-20

日本語教育学会 (1982)『日本語教育事典縮刷版』大修館書店

กาญจนา นาคสกุล (1978) ระบบเสียงภาษาไทย คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย,พ.ศ. ๒๕๒๐

ธัญญารัตน์ วัฒนนิธิกุล (2003) เอกสารประกอบการสอนวิชา 207261 ภาษาศาสตร์ภาษาญี่ปุ่น (เสียงและระบบเสียง) คณะมนุษยศาสตร์ มหาวิทยาลัยบูรพา พ.ศ. ๒๕๔๖

注

(1)中国語では、「B」は無気音 /p/ と発音し、「D」は無気音 /t/ と発音するという制約がある。

(2)他の例は、p.15 で、「いす」を [itʃu] のように発音することも、その学習者の母語は標準的なタイ語ではない。バンコク方言のタイ語母語話者なら、問題なく [isu] と発音できる。

(3)例えば、患者（かんじゃ）を [kan-ja]（カンヤ）のように発音することなど。

(4)タイ語には、平音（あるいは普通音）、低音、下がり音（あるいは下音）、高音、上がり音（あるいは上音）という声調が５つある。更に，第１声調、第２声調、第３声調、第４声調、第５声調という呼び方もある。

(5)氏名や外来語は例外である。

(6)タイ語の無気音は /k/, /c/, /p/, /t/ だけであるが、有声音の /d/, /b/, /ʔ/ も無気音子音となる。つまり、タイ語では、有声音・無声音（あるいは濁音・清音）の対立がないために、無声音の対立がある有声音はタイ語で無気音となる。

(7)この問題は、タイ語母語話者の英語習得にも問題がある。例えば、「NEW」は [njɯ] ではなく、/niw/ となる。

(8)タイ語では、「ドイツ」のことを英語の「Germany」のように「เยอรมัน」(/jɤːraman/) と呼ぶので、「Deutsch」と呼ぶ根本的な知識がないのである。

(9)更に、日本語の「ああ」「あっ」のような発音しやすい感動詞は、タイ語の /ɔː/ や /ɔː/ という感動詞に相当するために、/ɔ/ の発音の簡単さの証拠になるだろう。

(10)ところが、「パ」行で始まる単語は殆ど外来語とオノマトペ（擬音語・擬態語）である。オノマトペの場合、/ph/ より /p/ のほうが近いだろう。例えば、「パリパリ」、「ペコペコ」は /pharipari/, /phekopeko/ ではなく、/paripari/, /pekopeko/ のように聞こえる。

謝辞

川村統俊氏に文章の修正及び指導をいただいて，ここで心より感謝申し上げます。